さざなみ

須崎市教育研究所　発行
第８号　令和７年１１月１８日

選書会を行いました！

９月～１０月の間、市内小中学校で選書会を行いました。「日本で一番子どもたちが本を読むまちをつくる会」の皆さんから、２０年間にわたり約５万冊の本を寄付していただきました。２０年目という節目にあたり、選書会は今年で終了することになりました。毎回７００冊ほどの本を体育館に並べ、児童生徒たちは時間いっぱい食い入るように本を読んでいました。それぞれがお気に入りの１冊を選べたことだと思います。皆さんが選んだ本は２学期中に各学校へお届けいたします。

日本で一番子どもたちが本を読むまちをつくる会の皆さん、

須崎の子どもたちのために20年間本当にありがとうございました！

第2回須崎市不登校・不登校傾向対策委員会

１０月２３日に上記の会を行いました。今回は株式会社ブランド高知の代表取締役社長の中島匠一さんを講師にお招きし、ご講演をしていただきました。中島さん自身も不登校経験があり、当事者の気持ちや、人生を変えるきっかけになった小西先生との出会いなどについてお話していただきました。

「来てくれてありがとう。」

これは中島さんの恩師の小西豊先生が初めて会ったときにかけてくれた言葉だそうです。親の転勤の関係で転校が多かった中島さんは、その環境になじめず中学１年生から徐々に学校に通えなくなり、中学２年生で完全に不登校になったそうです。父からは「学校に行かなかったらホームレスになるぞ」と言われ、将来に希望が持てない日々を過ごしていました。そんな中、当時の担任から高知市教育支援センター「みらい」を紹介してもらいました。そこで会った小西豊先生にこの言葉をかけてもらった中島さん。今まで学校に行けていなかった自分に引け目を感じていた中島さんは、この言葉にとても救われたそうです。「ありのままの自分を受け入れてくれる温かい場所がここにある」と感じ、そこから支援センターでの生活が始まります。今の仕事（ブランド高知）を始めるきっかけを作ってくれたのも小西先生の、「君はアートをやったらいいよ。」という言葉だったそうです。中島先生から、参加者に３つのメッセージをいただいたのでご紹介します。

①不登校があったから今がある。

不登校当時は学校に行けない自分に悩んだ中島さんですが、それがあったから支援センターにつながり、そこでしかできない経験もでき、小西先生との運命の出会いがありました。また、ADHDの特性（発想力や集中力）を弱点ではなく、強みに変えられたのも不登校になってからの出会いや経験があったからだそうです。

②夢は１０回口に出して”叶える”。

「叶」という漢字は１０回口にすると書きます。やりたいこと、達成したいことはとにかく口に出して何回も口に出してね、と中島さんは小西先生から言われたそうです。何度も口に出すことでそれが行動を起こす原動力になるのではないかと思いました。

③まずはなんでも肯定してみよう。

小西先生はとにかく何でも肯定をしてくれたそうです。学校では人と違うことをすると奇異な目で見られていた中島さん。しかし、小西先生は中島さんがすることのすべてを「いいね！」「おもしろいね！」と認めてくれたそうです。

【参加者の感想】

・実際に不登校を体験した中島さんに話をうかがい、今学級にいる不登校の児童のことを重ね合わせて考えることができました。「不登校があったから今がある」と、その児童が言えるように、支援体制を整えることや、いろんな機関と協力すること、学校に来たときに温かく迎えられるように日頃からの学級経営に努めることなど、今後に生かしていきたいと思う内容でした。児童が自分自身を肯定できるよう、周りの肯定的な声がけをしていきたいです。 不登校を経験した方の話を、もっと聞きたいと思いました。

・不登校の経験を経て、現在ご活躍されている中島さんの生のお話を聞けて大変参考になりました。学校に通いにくいしんどさがあるけれど、その時はなぜしんどいのか、なぜ学校に行けないのか、ご本人も親御さんも苦しまれたことと思います。その中でも教育研究所で居場所を見つけて、社会人として立派にご活躍されているお話を聞いて、不登校の生徒を支援している身として励まされました。今は遠回りに感じても、その時その時の最善を尽くして、子どもたちの成長を見守っていきたいと思いました。
・未来を切り開くためには、一歩を踏み出す必要があるが、それを後押しできる人がいることが重要であると思ったし、自分自身が背中を押せる人でありたいと思った。 一歩を踏み出したあとには、人との出会いがあり、それがきっかけで道が拓ける可能性があるのだと感じた。
・今日の話は、教職員が聞くのもいいですが、子どもたちにも聞かせたい内容でした。ひきこもりの子どもたちには、動画などあればいいかなと思った。（紹介していただいた本、早速図書館で借りてきました）
・今日の講演はとても勉強になりました。本校にも保健室登校をしている児童が数名おり、登校のことを思うと体が悲鳴をあげる、注目されるのが嫌だ、怖いという思いを抱えています。そんな児童に何でも肯定的してあげること、来てくれてありがとうと伝えることなど、すぐに実践できることを教えていただきました。また、フリースクールや保護者の会など本人だけでなく保護者の方にも早くそのような情報をお知らせしていくこともあわせてやっていきたいと思います。
・実際に不登校だった方からの体験談を聞き、とても良い経験になりました。体の悲鳴や心の悲鳴がどのようなものか改めて具体的に知ることができました。教育研究所で、「よく来てくれたね」「ありがとう」となんでも肯定してくれたこと、自分のことを認めてくれたことが印象的に残っていることをきき、今後、児童生徒にそのような声掛けをしていこうと思いました。
・実際に不登校を経験した方の話を聞くのは初めてで、その時どういった感情だったのか、どうして欲しかったのか、そういった気持ちを直接聞けてとても勉強になりました。全員が同じ感情を持っているわけではないですが、どういった対応を求めているのか、どんな感情なのかを1人1人と関わる上でしっかり観察して関わっていきたいと思いました。
・実際に不登校を経験した講師の先生のお話が聞け、非常に有意義な会でした。助けとなった言葉がけの内容や、保護者の方同士が繋がる機会の提供の必要性など、今後の実践に生かせる内容を多く学ぶ事が出来ました。本日学んだ事を学校内でも共有し支援に活かしていきたいです。
・中島先生の講演を聞いて、全てを受け入れてくれる人の存在や安心して過ごせる居場所の大切さを改めて感じました。本校にも保健室で過ごしている児童がいますので、その児童にとって安心できる存在、居場所の一つとなれたらいいなと思います。また、からだの悲鳴・心の悲鳴といったことも、保健室に来室する児童は何か不安や一歩が踏み出せないこともあると思うので、気持ちに寄り添い、認めながら支援ができるようにしたいなと思いました。